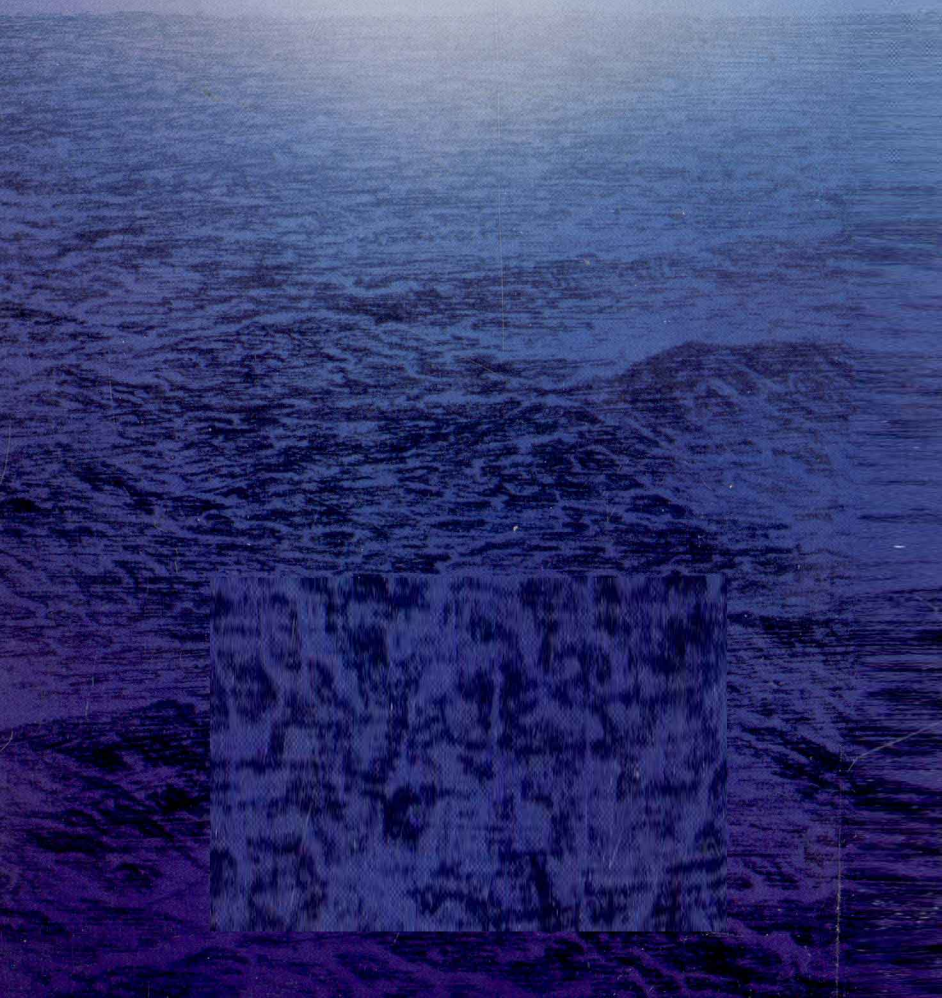


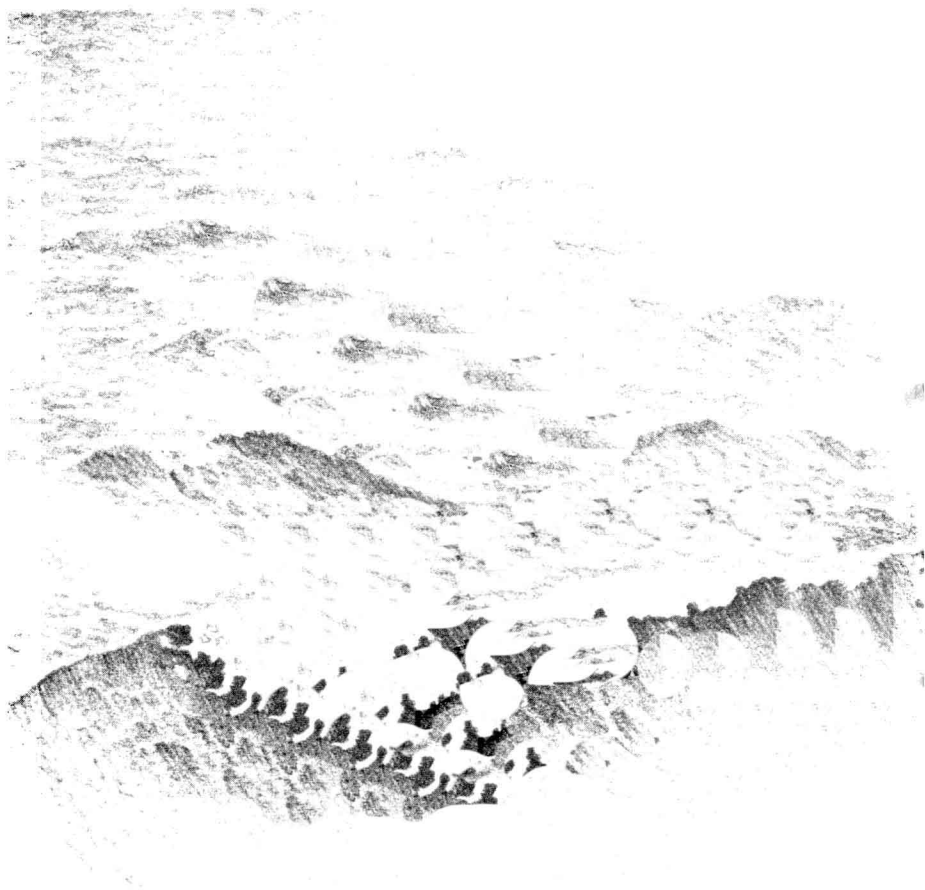
女の国籍^上

邱 永漢



女の国籍上

邱 永漢



日本經濟新聞社

女の国籍（上）

昭和五十四年五月十四日 一刷

著者 邱 永 漢

© Eikan Kyu 1979

発行者 黒 川 洸

発行所 日本経済新聞社

東京都千代田区大手町一―九―五

電話（三）三〇〇三 振替東京三―五五

印刷・奥村印刷／製本・大口製本

0093-9741-5825

目次

海に架ける橋	5
異邦の新娘	37
仏桑花の咲く街	69
ジャスミンの涙	101
南柯の夢	133
植民地から来た女	164
われ事において	196
大陸が呼ぶ	228
夕日と馬賊	260
黒河の寒い朝	292

女の国籍(上)

装丁 斎藤和雄

海に架ける橋

「では、只今より祝電のご披露をさせていただきます」と燕尾服に身をかためた司会者が部厚い電報の束を握って、テーブルの前に立った。

「李、北大路、ご両家の婚儀に際し、謹んでお喜び申し上げます。本結婚は内台融和の成否を占う試金石であり、新郎新婦はその範となり、良き家庭を営むべく、ここに衷心より末永き御多幸を祈ってやみません。内閣総理大臣 敬」

一瞬、あたりがシーンと鎮まりかえった。さすがだ、という感嘆の意味にも受けとれるし、どうも政略的な匂いがしすぎる、という反応のようにも受けとれる。なぜならばタカが植民地台湾の金持ちの息子と、日本内地の貧乏子爵の娘の結婚披露宴に、時の総理大臣から祝電が来るということは、大正九年という、あの時代から考えて、如何にも大袈裟なことであった。しかし、大袈裟なのは何も総理大

臣の祝電だけではなかった。

司会者が続いて朗読した祝電は台湾総督田健次郎からのものであった。田総督からの祝電は、植民地に君臨するその地位にふさわしい格式ばった、堅苦しいものであったが、多分、それは、総督秘書官の作文になるものであったからだろう。総督が如何に、この結婚の成立に熱心であったかは、ここに列席した大部分の人々が知っている。媒酌人に、日銀総裁井上準之助夫妻を頼んだのも、内閣総理大臣に祝電を打ってくれるように手配をしたのもいずれも田総督であった。いや、そもそもここへ集まった朝野の名士は、北大路子爵家のホンの一握りの親戚を除けば、殆んど田総督の動員した人々であった。

もちろん、新郎李明仁の父親である李天来は日本内地にも多くの知友を持っている。李天来は、台北市で茶商を営む大きな商人で、商売の関係でも内地人との往来が少なくないが、台湾人たちから「御用紳士」と陰口をきかれるくらい、総督府の役人たちにうけがよく、歴代総督の覚えもめでたかった。だから、日本内地から政治家や軍人や著名な民間人が台湾へやってきて土地の名士を仲間に入れて会食する必要が起こった時は、必ずのように名簿のなかに加えられた。おかげで、この十年間にずいぶん内地人の間に交際範囲が広がった。これらの人々も、李天来の長男が、

あまりきいたことのない名前だといえ、とにかく内地人の、それも華族の令嬢と婚儀相整い、帝国ホテルで晴れの披露宴をやるときかされては、万難排して出席しないわけにはいかなかった。

帝国ホテルの孔雀の間には五百人近いお祝いの客が集まった。台湾と何らかの関係のある内地の名士の大半が集まったといつてよい。彼等の好奇の視線にさらされているのは、新郎の李明仁、新婦の北大路華子の緊張した晴姿よりも、むしろ、新郎の父親李天来、その夫人の中国式の旗袍姿であり、それと対照的な子爵北大路康隆とその夫人の羽織袴姿であった。

どうして、こういう縁組ができてしまったのだろうか。

恐らく半年前には、花婿や花嫁はもとよりのこと、両方の父親の李天来も、北大路康隆も、こんなことになるとは想像してもいなかったに違いない。生活環境も風俗習慣も人生哲学も全く違うこの二つの家を結びつけることになったのは、ほかならぬ田健次郎の台湾総督就任である。

田健次郎は、日清戦争後、日本が台湾を統治するようになってからの文官第一号の総督である。実はそれまで台湾総督は陸海軍大將もしくは中将と定められ、初代の樺山資紀から明石元二郎まで七代の間、ずっと軍人が台湾総督をつとめてきた。明石総督は歴代総督の中でもスケールが大

きく、下村海南を総務長官に使い、内は日月潭の発電や嘉南大圳の計画を推し進め、外には台湾を足場にした積極的な南進政策をとり、台湾人たちの間にもなかなかウケがよかった。しかし、あまり仕事をやりすぎて就任後僅か一年で病床についてしまい、最後の三カ月はほとんど寝たきりになっていた。

後任として選ばれたのが田健次郎であるが、軍人でないものを総督に任命するために、先ず総督府官制を改正し、従来の「総督ハ親任トス陸海軍大將若ハ中将ヲ以テ之ニ充ツ」とあったのを、単に「総督ハ親任トス」とした。しかし、田健次郎が文官として台湾総督に就任したことは、単に武官が文官に変わったというだけでなく、植民地の經營を武力によってではなく、別の形で推し進めて行こうという新しい意味があった。

田総督は着任すると、すぐその翌日、庁舎の広場に高等官以上のものを集め、施政方針の訓辞を行ったが、その内容を要約すると、(一)台湾は帝国憲法の統治に従属する版図であって、イギリスやフランスの植民地のように、本国の政治的な足場だったり、経済的利益のために存在するものと同一視してはいけぬ。(二)民情風習の全く異なる本島人を、性急に内地人と同一に律してはいけぬ。(三)この天与の好位置、好地勢を利用して、益々、交通貿易の途をひら

き、国富の増進をはかるべきである。といったようなことであるが、その翌々日から早速、西部台湾の巡視に出かけ、帰ってくるとすぐに、各庁長を召集して、教化問題から警察、交通、水利、農林、漁塢、衛生、社会問題一般、官吏の服務態度に至るまで、自分の感じたことを大胆率直に述べた。その精力的なやり方は今までと違った型破りのものであったが、それよりも当時の植民地の役人たちを一番びっくりさせたのは、被支配者である台湾人に同情的な態度を見せたことであつた。

「今度の総督は本島人の肩を持ちすぎやしないか」

「いや、田なんて姓からして、あいつの祖先はひょっとしたらシナ人じゃないか」

と役人たちは悪口を言ったが、総督の訓辞や行動が新聞に載ると、

「今度の総督は話のわかる男らしいぞ」

「何といつても、我々と同じ姓を名乗る総督が来たんだからな」

と台湾人の間に噂が拡がり、新しい総督の人氣が急激に上昇した。

植民地の人たちに本国の風俗習慣を無理矢理押しつけるのが間違ひであることは今日なら常識であろう。田健次郎のような、大臣をやった経歴もあるインテリにとっては、

これは人間として当たり前のことを述べただけのことにすぎない。ただ、そういう当たり前のことが大正時代の日本の植民地には全く通用しなかった。だから田総督は内地人、わけでも役人たちの間では評判が悪かったが、それを逆さにした分だけ台湾本島人の間で歓迎された。

彼には理想があつた。その理想とは、本島人を内地人とけこませて、やがて日本人に一本化してしまうことであつた。但し、そうは言つても、それを実現することにあまり性急であつてはならない。時間をかけてやることであり、一番いい方法は、多分、内地人と台湾人を結婚させて、血のつながりをつくって行くことであらう、とそう考へたのである。

日本人も中国人も血統を重視する。当時、本島人と呼ばれていた台湾人も、その祖先は福建省もしくは広東省から渡来した人々であるから、血縁で団結し、血縁以外の関係をあまり信用しない。

一方、日本人にも家族主義の紐帯があり、家長の權威は敵たるものであつたが、何といつても、日本人には「日本人であること」の意識の方が強い。その日本人が植民地をつくり、異民族を支配下におくようになると、異民族をどう扱つてよいか、心の中では当惑してしまふ。まさかお前た

ちは俺たちの奴隷だ、と言うわけにはいかないし、かといって、同胞として受け入れるには、あまりにも自分たちからは遠すぎる。「一視同仁」というのが植民地を治める時の日本人の合言葉であるが、日本人は自分たちに理解のできない言葉を喋る人間を同胞として受け入れるだけの度量はない。そこで、日本語の喋れない人間を一段下に見る一方、日本語を無理矢理喋らせようとして努力する。そうした場合の日本人のせっかちさは、学校で台湾語を喋った児童から罰金をとるといった極端な形になって現われたりする。

田健次郎は、そうした日本人のせっかちさには批判的であったが、風俗習慣の違う台湾人を同化しなければならぬという点では、日本人の物の考え方の枠からはみ出るほど桁はずれというわけではなかった。台湾人を同化して帝国臣民の一員にすることはいずれにしても必要なことである。しかし、そのためには長い時間がかかる。教育も必要なら選挙権をあたえる必要もある。なかでも時間はかかるけれども、一番自然かつ効果的な方法は、内地人と本島人を結婚させることである。台湾総督として彼は前例を見ないほど被支配者に好意的であったが、結婚を通じて台湾人を日本人化することが日本のためになると信じて疑わない点においては日本人的な日本人であった。

そこで、土着の有力者である李天来が総督の新任祝賀の

挨拶に参上した時、

「おたくには息子さんは何人いますか」とすぐにきいた。

「ハア。五人います」

「ホオ。五人も！」

と総督は感嘆の声をあげた。

「で、お嬢さんの方は？」

「娘は七人います。もう上の方は二人ばかり片づいておりますが」

「なかなかの子福者ですな。いや、大したものだ」

十二人くらいの子供は、台湾では大して珍しいことではない。金持ちになると、一人で二人や三人の妻妾を持っているのが普通だし、現に李天来だって、本妻のほかに第二夫人、第三夫人がいる。ほかに最近、若いのができかっているというゴシップもある。もちろん、田総督は着任して間もなくであるから、そんなところまではわかっていない。彼が関心を持っているのは、李家が台湾でも代表的な有力者であり、その家に結婚適齢期に達した息子はいないかということだけであった。

「で、ご長男はことしいくつになるかね？」と総督はきいた。

「本年とって二十五歳になります」

「ホオ。二十五歳ね。学校は？」

「学校は国語学校へ行かせました」

「じゃ、公学校の教師にでもなっているのかね？」

「いや」と李天来は思わず顔を赤らめながら首を横にふった。「セガレの方はどうも教師が柄にあっていないようで、家業の方を手伝っております」

国語学校とは、総督府が台湾人の子弟に日本語教育をするために建てた学校であり、その出身者は大抵、公学校と呼ばれる台湾人小学校の教師になっている。教師という職業は、金にはならないけれども、世間から尊敬の眼をもつて見られているから、決して悪い職業ではない。しかし、李天来の長男の李明仁は親の力で国語学校に入れてもらったけれどもどこから見ても教師向きにはできていなかったし、従って学校の成績も尻の方から数えた方が早かった。その上、金持ちの後継ぎに生まれ、世間もそういう具合に扱うので、女たちからチャホヤされるし、今風にいえば、早くからブレイボーイの素質を発揮していた。だから総督から、「結婚していますか？」ときかれた時、李天来は、とつさに返答の言葉に詰まってしまい、

「いえいえ、独り者ではありますが」と妙な返事の仕方をしてしまった。正式に結婚もしておらず、戸籍も確かにその通りになっている。

しかし、実は、明仁には、そこにかこつた女がおり、二人の間には既に二つになる娘もいた。ただ、女は酒家出身の女であり身分が違いすぎるから、李家のような家門に正式に受け入れられる可能性はまずなかった。従って、いずれ妻としてしかるべき家から立派な嫁を迎え、今までの女は適当に処置をしなければならぬだろうと父親の方は考えていた。

狭い台湾のこととて、どこの家の息子がどんなブライベイトな生活をしているか、他人の噂にのほらないわけはない。善事は、鐘太鼓を叩いて宣伝してまわっても誰の耳にも入らないが、悪事は千里を走るといふから、折角、良家の縁談が持ちあがっても、話が進みはじめると途中から消えてなくなってしまうのである。そういう目に何回か遭つて、李天来が頭を抱えている時に、長男のことをきかれたので、思わずそういうどっちともとれるような生返事をしてしまったが、李家の長男がまだ独身であるときかされた総督は、急に身体を乗り出すと、

「じゃ、君のところの息子さんの嫁さんの世話はわしがするが、どうだろうか」

「それは／＼。身にあまる光栄でございます」

大正時代の台湾総督といえは、台湾の人たちにとっては封建時代の藩主のようなものである。その台湾総督が台湾

人の結婚の縁結びをするというのは、破天荒なことであり、いやといつて断られる筋のことではない。現に田総督の三代前の佐久間総督の如きは、毎年、新年宴会の席上に、昔の大名が家臣にあたえる大酒杯で五合も一升も入る奴を持ち込ませ、近う近うと言って、酒をなみなみとつがせて、無理矢理のませる。下戸の輩は泣くに泣けなくてワイシャツとチョッキの間に何枚もハンカチをしのばせて、飲むふりをしてハンカチにしみこませ、あわてて便所に駆け込んでハンカチをしぼるやら、馴染みの芸者に別室で紹介してもらおうといった光景のあった時代なのである。

総督がこうするといえは、言いなりになるよりはかない時代であった。総督は法律であり、また事実、帝国議会の承認を得ずして、台湾総督は法律が制定できる権限を持っていた。

「それでは宜しくお願い致します」と言つて李天来が総督官邸を引きあげるまでに長い時間はかからなかった。

田健次郎としては台湾総督として赴任する前から、ひそかに期するところがあった。

日本内地には、あまり多くないが台湾本島人の学生が留学に来ていて、卒業する頃になると内地人の娘を連れて帰って行く。留学生の交際範囲は狭いから、どうせ知り合い

になるのは下宿の娘が一番多いが、しかし、それでも本島人と内地人が結婚して、その生まれた子供が日本語で教育を受けるようになれば、今の本島人よりはよほど内地人に近い本島人ができあがつて行く。この調子で二十年、三十年、更に半世紀もたてば、台湾は実質的に今日よりもずっと大日本帝国の版図にふさわしいものになることはまず間違いない。

留学生の姿を見ていてさえも、そういう感じがするのだから、台湾の有力者たちの子弟と、下宿屋の娘でない、ちゃんとした家柄の娘を結婚させれば、もつと目的にかんたものができあがる。そう思つて、自分の交友関係のなかで、娘を外地へやつてもよさそうな家はないだろうか、かねてからそれとなく物色をしていた。

一番適当と思われるのは、血筋はよいが、経済的にはあまり恵まれていない華族階級、わけても元公卿出身の人たちである。旧徳川時代の大名出身の華族たちは、何といつても、まだ旧藩主時代の遺産があつて、裕福な暮らしができてゐる。一方、明治の元勳と言われる人々の子弟は、現に勢力を持つてゐるし、あちこち金の成る木とつながつてゐる。更に巨額の寄付をして男爵になった新興成金は、そもそも金の力で華族の仲間入りをしたのだから、華族としての序列は低いところにあるが、力という点ではむしろ公

侯爵に匹敵し、娘を嫁にやるなら、東大出身の秀才の中からよりどり見どりである。こうした中で、骨董品のようにボツリととり残されているのは、昔から天皇家に仕えてきた公卿あがりの華族たちであり、この人たちは、旧時代の財産らしいものも受け継いでいないし、かといって実社会で生存競争に打ち勝って行くだけの現世的な才覚も持っていない。肩書だけは伯爵とか子爵とか、宮中席次は上の方にあるけれども、生活には困窮しており、どこからでもよいから、とにかく金蔓がのびてくるのを心待ちにしているのである。

そうした、俗にいう貧乏華族の一人が北大路子爵であった。当主の康隆は、北大路という苗字からも推察されるように、もともと京都の出身であるが、先代の時から東京へ居を移し、千駄谷に長く住んでいる。田とは友人関係を通じて何回か過去において接触があったが、この度、田の台湾総督就任の発令があつてから、東京の田の私邸までわざわざ訪ねて来たことがあつた。要件は、台湾の南部にある現地資本系の製糖会社と日本の某財閥の間に資本提携の話があり、その交渉にあたって、自分が仲立ちをやっているが、近く台湾に行くことになるので、よろしく頼むというようなことであつた。その時の話のついでに、台湾側の財閥の息子が日本内地に留学に来ていて、家にもしばしば遊

びに来ており、なかなか好ましい青年だ、娘もそう言っている、といった話が出てきた。その時、田はすかさず、「お嫁さんを外地にやるについて、おたくの奥さんはどう言っていますか？」

ときいた。すると、北大路子爵は、

「私はね、学生時代に中国から来た女子留学生にあこがれて真剣に結婚を考えたこともありましたがね。何ごとも運命がきめるものだと思っていますよ」

と、自分の考えだけを述べて、田の質問には直接答えなかつた。田は、それを、北大路家の意志決定は当主自身がやることで、妻の意見は問題にならないという意味合いに解釈した。北大路家のように、格式があつて、経済力が伴わない家は、町人あがりの工場主とか、運転手あがりのバス会社の社長あたりと姻戚になるか、それとも一足跳びに、外地の金持ちと血縁関係があるようになればよいのである。

田が李天来の息子の縁談の話をした時、田の頭の中には北大路子爵の娘のことがあつた。というのは、つい二、三日間、北大路から手紙があつて、一週間くらいうちに台湾へ来る旨の知らせがあつたばかりだからである。

北大路康隆と田は、それほど親しい間柄ではなかつたが、爵位のある人が台湾に来るのは、珍しいことだつた

し、それに北大路の娘を李天来の息子に娶せようという下心があったので、田は北大路を総督官邸の賓客として迎える決心をし、秘書官に命じて北大路の到着の日には、わざわざ基隆港まで迎えに行かせた。

秘書官は北大路子爵は総督の賓客になるぐらいだから、当然、一等船客であると思っていた。ところが、名簿をしらべても、一等には北大路という名前はいない。名簿をひっくりかえして、やっと二等に乗っていることがわかったが、子爵だというのにお付きの者も連れておらず、秘書官が船長に話をつけて一等のキャビンに案内した時も自分でトランクを持ってそのあとについてきたので、秘書官があらわてトランクを奪うようにしてとりあげ、ボーイに手渡す有様であった。三等に乗らないで、二等にしておいたので、まだいくらか面目も保てたが、北大路は、総督がわざわざ秘書官を迎えによこすとは考えてもいなかった。一方、秘書官の方は、内地から来る高位高官を扱い慣れてきたので、いささか勝手が違ったが、そのことはおくびにも出さず、子爵を汽車の一等車に乗せると、台北駅までお供をし、駅では待たせておいた黒塗りの人力車に乗りかえてもらって、総督官邸まで無事、連れ戻ってきた。

「ご令嬢の縁談はその後、どうなりましたか」

と一通りの挨拶が終わると、田はすぐにきいた。まさか

そんな質問がでるとは思っていなかったので、北大路はきょとんとしていたが、

「いつか台湾の青年と縁談があるようなことをおっしゃっていたじゃありませんか」と田があとを続けると、

「そのことでしたら、それっきりですよ。どうも同じ男女間のことでも、国柄が違うと、おいそれとは進みませんな」

苦笑ともとれるような表情を北大路は浮かべた。田はそれを見ると、

「実は、こちらの名望家の長男に、私が嫁の世話をしようという約束をしましてな。ええ、もちろん、内地人の、れっきとした家柄のお嬢さんを世話してやるつもりでしてな。北大路さん。ひとついかがですか。おたくのお嬢さんにはまだ一度もお目にかかっておりませんが、あなたのお嬢さんなら、さぞかし別嬪でしょうからな。お年はいくつですか。学校は？ 親元を離れて、遠くへやるのは心細いでしょうが、この通り、あなたもおいでになっておわかりのように、台湾はそう遠いところでもないと思いますよ」

いつの間にか総督は熱心に口説きはじめていた。

北大路子爵を口説きおとすくらいの自信は田健次郎にあ

った。

先ず第一に、北大路には経済的なバックがない。三井とか三菱とか大倉あたりに出入りして、何とか利権のお先棒を担いで、生活の足しにしようと努力しているが、これはなかなか容易に成功しない。仮にうまく成功したとしても、何がしかの謝礼を支払ってもらえるのは植民地に進出しようとしている財閥の側ではなくて、内地の財閥と結びついて、資本の援助を得たがっている植民地の現地資本側である。しかし、台湾側に対して、北大路は大きなコネをもっておらず、自分が内地の財閥に顔がきくことを台湾側に知ってもらうためにはさしあたり総督の力を借りるよりほかないのである。

この前、北大路は資金不足に悩んでいる台湾南部の本島人資本家が経営する製糖会社に内地資本を参加させる仕事で台湾にやって来るといっていたが、田が台湾に乗り込んできて、部下たちに調べさせたところでは、この話はさして見込みのある話ではなかった。

もともと台湾の製糖会社は、濫立気味であり、激甚な競争のために内地資本で経営している会社の中にすら経営困難で売りに出ている会社が、一社ならずある。本島人経営の製糖会社もその影響を受けて、金ぐりに苦しんでいることは事実であるが、これらの本島人経営者は多角経営をやっ

ていて他にも資産があり、製糖の仕事が不振でも倒産するほど財政状態が悪いということはない。だから、資本参加をすれば、実質上、会社の経営権を握ってしまおうとする内地資本の言いなりになるとはまず考えられない。彼等が欲しがっているのは、資本よりも、むしろ要路の日本人とのパイプである。州庁や総督府とのつながりをよくしておかなければ、植民地の被支配的位置にある民族資本家の商売が成り立っていく筈がない。だから、役人が変われば、内地人よりも真っ先に駆けつけてご機嫌をとるのは本島人の資本家たちであり、お歳暮とかお中元とかに立派な贈物を届けて来るのも彼等である。

彼等は日本人が、酒宴せめに弱いことも充分、承知しているが、それよりも日本人同士の人のつながりに弱いことを熟知している。北大路が田総督に告げた南部の製糖会社も、一時は役人との関係がうまく行かず、身売りの話が出たことがあったが、少し前に他の製糖会社の内地人の重役をひっこ抜いて、顧問に入れたことでうまくおさまり、今は身売りの話は遠のいてしまっているのである。

いずれにしても、北大路子爵の目的は、台湾に収入の手がかりをつくることであるから、砂糖がお茶に変わったところで、別にどうということはない。会社の身売りの仲立ちをするのは、話がしにくい、娘を売り込む話ならば、

總督が口をきいてくれるのだから、場合によっては一発で話ができる。相手は台湾にその名を知られた李家であり、李家は資産家でもあるが、最近、新しくつくりはじめた紅茶の技術導入とアメリカ輸出の手がかりを得るために、内地の大きな商社と取引関係ができあがったばかりのところである。總督のお声がかかれば、その商社の支店が北大路に顧問の肩書をくれた上に、毎月、なにがしかのお手当をくれてやるくらいのことは何でもないことなのである。

まして話が、日台間の融和という国家的な利益につながり、個人の小さな意見などさしはさむ余地のないところまで発展して行けば、北大路子爵が一も二もなく賛意を表すことになるのは、理の当然であつた。

「とにかく、その婿になるといふ青年を一度見せてくれませんか」

と子爵は言つた。

「ご尤も」。早速、李天来と息子をおひき合わせをしよう。実は私も、父親の方は知っているが、息子の方は会つたことがないのでね」

秘書官がすぐに手配をして、翌日の夕刻には、李天来の父子が總督官邸の晚餐に招ばれてきた。目的が目的だったから、他の客はまじえず、總督と子爵と李天来、明仁父子だけが食卓についた。

田總督の前に連れて來られた李明仁はさすがに緊張の色をかくしきれないでいた。背は父親の李天来より十センチは高く、父親がでっぷり肥っているのと対照的にほっそりとしており、南国生まれにしてはどちらかといえば、肌は白く、眉は太く、笑つた時の眼が涼しく、どこことなく愛想のよさが漂っている。ちょうど冬だったせいもあるが、きちんと着こなした三つ揃いの紺の背広がよく板についていて、東京からやつて來た田や北大路の眼にも田舎臭い感じは全くしなかった。育ちのよい、物おじのしない、目上の人から見ても、一口でいえば好ましい青年といつてよいだろう。その夜の料理は、西洋料理であつたが、ズラリと並んでる様子が見えないのは、そういう席の場数をふんできた証拠でもある。

「國語学校を卒業したのはいつかね」と總督がきくと、父親の台湾訛りの日本語とは違って、

「ハイ。二年前です」ときちんとした日本語が返つてきた。

「國語学校を出ると、学校の先生になるのが普通だときいているが……」

「ハイ、まず九〇%がそうです。でも私の家では私が長男で、父が私に家業をつぐことを望んでいたものですから」